



9月



「就学前の非認知能力レンズで『いいとこ』みつけ!!」 中編

岡山県教育委員会主催で実施した「令和四年度 就学前の非認知能力育成支援講座」のうち、事前研修として配信された動画の要旨を三回に分けてお届けします。講師は、岡山大学准教授の中山芳一（なかやま・よしかず）先生です。

●どうして非認知能力が重要なのか

非認知能力は、以前から我々が大事だと認識していた力なんです。例えば、「人間力」とか、海外では、「EQ」や「ソフトスキル」など。これらは全て、テストで明確な点数にできませんから、非認知能力に該当します。

では、なぜ注目を集めているのか。ヘックマン先生の検証もありますが、一番大きな流れとしては、社会の変化に対応するためにとても必要な力なんです。今、我々の生きているこの社会は、変化が激しくなっています。例えば、二十五年前はポケットベルを使っていましたが、約二年でPHSやガラケーに変わり、それが今やスマホです。二十五年でポケットベルがスマホになる。では、さらに二十五年後には、我々

は何を使っているか、想像が難しいですね。さらに、コロナ禍や現在の国際情勢などから、社会はより激しく変化していくと考えられます。

そして、社会の変化の象徴的存在がAI。人工知能ではないでしょうか。AIは、認知能力がずば抜けています。情報処理、情報管理、その上で指示を出すなどの能力は、非常にずば抜けてます。今までは人間が頑張っていた分野ですが、AIが人間よりも速く正確に休みなく処理してくれることで、我々は楽になったし、別のことができるようになるわけです。

AIの強みは認知能力、では人間の強みは何かというと、認知能力のほかに非認知能力なんです。AIが持ち合わせていない非認知能力、例えば他の人に共感したり、意欲をもって何かに挑戦したりという

ことは、人間だから持ち合わせている。つまり、非認知能力をより伸ばし、発揮していくことで、AIとパートナーシップを築き、より豊かな社会を築くことができると思います。だから、非認知能力が人間に必要なんだと言われるようになったわけです。

また、社会の変化の問題でいうと、決まった正解だけでは、我々は生きていけないんです。学生時代までは、正解をインプットしてやってきているかもしれませんが、社会人になると、様々な問題に取り組むことが求められます。社会の変化が早くなればなるほど、よりそれを求められる。ではどうすれば良いかというと、正解ではないかもしれないけど、自分や他の人たちが納得できる「納得解」や、より適切な解と思われる「最適解」を求めることが大切になります。そのためには、やる気や粘り強さ、他者と折り合いをつける力など、非認知能力を身につけることが必要になってくると思います。

●非認知能力の伸ばし方

では、どうやって非認知能力を伸ばしていくのか、伸ばし方について話します。

非認知能力は、親や教師など大人が教えることによって伸ばせるものではないんで

す。「自分が伸ばしたい」「自分で伸ばそう」など、「自分の意識で伸ばしていきたい力」、これが、非認知能力の最大の特徴です。だから、「こういう風にやってみたいな」「やってみよう」という本人の意識を、どのように我々が意識づけしていくかが重要になってきます。認知能力のように、特別なトレーニングはいりません。そうではなくて、「こゝなりたい」「やってみよう」という意識をいかにサポートできるかが大事です。例えば、このような意識です。

- ・自分を高める力↓「よしやるぞ」
- ・自分と向き合う力↓「嫌なことでも頑張ってみよう」
- ・他者とつながる力↓「友達と仲良くして一緒に遊ぼう」

●プロセスの中で大人が価値を見つける

そして、大人として、子どもの意識づけをサポートしていく上で、何が重要かというと、結果でなくプロセスに注目することです。できたかどうかの二択ではなく、子どもが遊びや行事、体験活動やお手伝いなど、何かに取り組んでいるとき、結果にたどり着くまでのプロセス（過程）ですね。この過程の中には、様々な要素があります。「我慢しながら粘り強くやる」としてるとか、



倉敷市立琴浦西小学校
4年 長尾謙太郎 (令和4年度)

「ぼくの顔」(版画)

丸いほっぺを表現するのに円をかくように工夫してほりました。難しかったけど、楽しくてもっとほりたくなりました。

●「いいと」を意識づけする大人の関わり

引き続き実践編として、非認知能力レンズを持つための三つの「大人の関わりポイント」を紹介していきます。

くてわかりにくいのと似ています。今、我々は、どちらの能力も伸ばしていくために、体験のプロセスから価値を見つけていくことが必要です。しかし、見えにくいので、見えやすくするためのレンズを持つとう、つまり、非認知能力レンズを持つことで、プロセスから子どもの価値を見つけることができる、ということです。

な姿を、価値あることとして見つけることができると思います。

ではここで、ワークをしてみましょう。

・いつの間にかできるようになっているお子さんの言動を思い浮かべてみてください。

(食器の片付けや挨拶できるなど)

・そして、どんなプロセス(姿・行動)が見えて、どんないいと(価値)として捉えることができますか？

さて、皆さん思いましたか？ これ

が大事なことです。いわゆる「意味づけ」です。例えば、食器の片付けができるようになった子どもの行動を見て、「親が言わないと片付けなかったのに、声をかけなくても意識して運んでくれるようになっていたんだな」と感じる。ここにはどんな価値があるかというところ、家族のことを思っている生活しようとしてくれているんだな、つまり、「他者とつながる力を持つてくれているんだな」と捉えることができるということです。これはあくまでも例ですが、このように考えてください。

(後編へ続く)

「もっとやりたいとやる気を出している」とか、「他の友達と助け合っている」とか。そのような姿こそ、子どもたちが今見せてくれている価値であり、とても大事なものです。

さて、ここで「体験」と「経験」の言葉の区別について説明します。体験したもののなかから、経験に変わっていくのですが、体験全てが経験に変わるわけではありません。非常に思いに残ったり、気づきがあったり、頑張れた点を感じたり、褒めてもらえたりと、体験のプロセスの中に、子どもが何か価値を感じたときに、経験に変わります。

体験のプロセス→価値に気づくことで経験に変わる→気づいた価値に対して「もっと伸ばしたい」など、教訓を見い出すことで学びになる→認知能力も非認知能力も伸ばすことにつながる、ということですね。ここまではガイドランス編です。

●一、「非認知能力レンズ」を持って、プロセスから「いいと(価値)」を見つける。

- ・一、「非認知能力レンズ」を持って、プロセスから「いいと(価値)」を見つける
- ①できていること(二)目を向ける
- ②ポジティブな見方に変えてみる
- ・二、子どもの気持ちや想いを聞いてみる
- ・三、意識づけのために伝える

①できていること(二)目を向ける。

この「できる」は、「テストで満点とれた」など、結果という意味での「できる」とは少し違います。例を挙げると、子どもが、食べた後の食器を片付けて流し台に持つていく。普段の暮らしの中でありそうな行動ですね。テストで満点とれたときはすごく褒められるけど、このような行動だと、大人はうまく見つけて褒められていないことがありません。このような普段の暮らしの何気ない価値ある姿や行動を、大人が見つけられるかどうか、そのためのポイントは、普段のわが子の姿や行動を、当たり前だと思わないこと。「当たり前」の反対は「有り難し」です。要は、めったにないこと、貴重なことなんです。

我々が当たり前と捉えがちなことを「価値ある貴重なものだ」と思えるようになる

と、子どもたちが目の前で見せてくれる様々